発問例

●二九九ページ

問 **意味段落1から3の体験を時系列に並べると、筆者の「歴史」に対する考え方のどのような変化が分かるか。**

答 「学校で受けた歴史教育」をとおして「おもしろそうなものは、いつも過去にある」と考えていた「わたし」だったが（意味段落2）、「ビートルズの新曲」がラジオで放送される「歴史的瞬間」に立ち会ったことで、「歴史」とは自分自身が参加し作られるものであるという、それまでの「歴史」のとらえ方を揺さぶる経験を持つ（意味段落1）。さらに「半世紀以上」の読書体験をとおして、「過去」の小説が「文学史」に書いてあるような「評判」とは「えらく違う」ことに気づき、自分で「文学史」を書いてみようと考えるにいたる（意味段落3）。

補 本教材の構成を考えるうえで、意味段落1と意味段落2の時系列が逆になっている点に注意を払いたい。意味段落1での「感動」が意味段落3での自分で「文学史」を書くという発想につながっていく。全体のまとめとして発問することがのぞましい。

●三〇〇ページ

問 **◉「感動」（14行目）とは、どのような感動か。**

答 「歴史的瞬間」に立ち会えたことによる感動。補この内実を後の部分で読み解いていく。それまで筆者は、「歴史」は、遠い過去の死んでしまったできごとで、生きている自分とは関係がないと思っていたが、自分が参加しながら作られていくものだと気がついた。ビートルズの新曲そのものだけでなく、そのことに感動している。

●三〇一ページ

問 **◉自分のことを「すごく単純」（3行目）というのは、なぜか。**

答 学校で受けた教育について、自分で考えることなく、そのまま鵜呑みにしていたから。

問 **「学校で受けた歴史教育」（15行目）を通して、「私」は「歴史」に対してどう考えるようになったか。**

答 偉大なもの、立派なもの、おもしそうものはいつも過去にあり、新しいものはつまらないものに決まっていると考えるようになった。

補 「幼い」頃の筆者の「歴史」認識は、歴史とは遠い過去の出来事であって、生きている「現在」の自分がけっして触れられない、関係がないというものだった。

●三〇二ページ

問 **◉父母や祖父母のたとえから、筆者は距離感と立派さの関係をどのように捉えていることが分かるか。**

答 人々にとって距離が遠く、想像が及ばないものほど偉大に感じられ、敬われると捉えている。

●三〇五ページ

問 **◉「確かに、その人たちの言うとおりだったのです」（6行目）から、筆者のどのような思いが読み取れるか。**

答 文学が変わっていないという筆者のような考え方は文学史にはなかった。「確かに」そうだが、それでいいのだろうか?という疑問も持っている。

問 **◉「説得してみる」（11行目）「眠っている」「遊びにくる」（12行目）などの表現から、筆者が「過去」の小説をどのように捉えていることが分かるか。**

答 いずれも人間に対して使う表現であるため、「過去」の小説を生きているものとしてとらえている。

問 **「鑑賞するために壁に掛けられた絵」（15行目）とは、「過去」の小説のどのような状態を言うのか。**

答「鑑賞」とは、芸術作品に接してその表現するところをつかみとり、そのよさを味わうことを意味する。「壁に掛けられた絵」とは、「文学史」に記された「評判」にしたがって選別された「芸術作品」が陳列され、その「よさ」に関しても定められている状態を言う。

補「歴史」は現在の自分も参加しながら作られていくものだという筆者の認識に触れることができる。半ば固定化された「評判」から自覚的に距離をとり、自分自身を基点にした「文学史」を作り出す活動につなげていきたい。

●三〇六ページ

問**「オモチャみたいなもの」（1行目）という表現から、筆者が「文学史」をどうあるべきと考えていることが分かるか。**

答既存の「評判」に縛られることなく自由自在に組み合わせて作り上げることができる枠組み。

補本教材のタイトルの「大人にはわからない」の「大人」とは、既存の「文学史」を疑うという発想を持ちにくい「人たち」を指し、本文中の「なに、子どもみたいなこと言ってるんだい。『文学史』を読んでみなよ。そんなこと、どこにも書いていないぜ。」（三〇五ページ）と「わたし」をたしなめる「人たち」を言う。

問**◉「いや」（2行目）という否定から、どのような状況や筆者の考えが読み取れるか。**

答「歴史」をオモチャのように扱う筆者の考えが、決して一般的ではない状況がわかる。そうであるからこそ、実行する必要があると筆者は強く思っている。

語句の研究

●三〇〇ページ

3偉大な人たち　ビートルズを指す。形式段落2以降で、「偉大なもの、立派なもの、おもしろいもの」は「いつも過去にある」と考えていたと語られるそれ以前の「わたし」の変化として位置づけられる。

●三〇一ページ

1立ち会った　「立ち会う」とは物事の成り行きや結果を見守るためにその場にいることを意味する。その意味で、いつも過去にあるはずの「歴史」に「現在」の「わたし」が触れ得た、その実感に「わたし」は「感動」を覚えたということになる。

キー・ポイント　「歴史」　過去の人間生活に起こった事象の変遷・発展の経過を、ある観点から秩序づけた記述を指す。「歴史」とはありのままの事実ではなく、あくまでも「歴史」を作る特定の観点・地点を基点とする枠組みであるという点に注意したい。

3単純な少年　従来の考え方やとらえ方が一面的で浅かったと語ることで、「今」の「わたし」がそうではないことが示唆されている。

●三〇二ページ

キー・ポイント　「現在」　「現在」とは、過去と未来の間、過去から未来へと移り行く今、あるいは、近い過去や未来を含む今を表す概念である。「現在」が近い「未来」と近い「過去」とをあわせ持つと考えるとすれば、「現在」の自分自身も当然「歴史」の一部として参加しているということになる。

3「現代」　①現在の世。今の世。当世。②歴史の時代区分の一つ。日本では第二次世界大戦終結後の時代。広義には明治維新以後をさすこともある。東洋史では辛亥革命以後の時代。西洋史では第一次世界大戦終結後の時代。「歴史」「過去」に対するものとして、「　」を付して用いている。

●三〇四ページ

5僕が聞いてきた評判　「評判」とは批評してその是非を判定することを言う。「過去」の小説はすでに「判定」されたものであり、その「評判」は「文学史」のなかで定められている。古今東西の小説を読むなかで、「わたし」はその「評判」に違和感を覚えるようになる。

キー・ポイント　「文学史」　文学の発展の歴史。また、それを研究する学問やそれを記述したもの。ここまでの「歴史」や「過去」に関する筆者独自のとらえ方を「文学史」にも敷衍したい。「歴史」が「現在」の「私」自身が参加し形成され得るものだとすれば、「文学史」もそれと同様に、「過去」の作品を「現在」の「私」の視点から評価し直すことが可能となる。

7敬愛　うやまって大切にすること。尊敬し、親しみの気持をもつこと。

●三〇五ページ

10陳列されているガラス棚　「過去」の小説が「文学史」のなかで、まるで博物館のガラスの展示ケース内に大切に並べられるかのように扱われているということ。

15鑑賞　芸術作品などを見たり聞いたり読んだりして、それが表現しようとするところをつかみとり、そのよさを味わうこと。

注意する語句

（＊で用例を示した）

加速度的…程度がぐんぐん増すさま。
＊加速度的に物価が高騰している。

さびれる…盛んだったものの活気が無くなって衰える。ひっそりして寂しくなる。
＊さびれた商店街を通る。

老いさらばえる…年を取って醜くなる。老衰する。老いさらぼう。
＊老いさらばえて見る影もない。

不可逆的…取り返しがつかないさま。再び元の状態には戻れないさま。
＊歴史というのは、不可逆的なものだ。

えらく…程度がはなはだしいさま。とんでもなく。
＊君もえらく立派になったものだ。